



# 守ること、伝えること。情報発信について、2題。

Clip & Think

文化財をまもり手を育てるー 東京国立博物館のシンポジウム

東京国立博物館では、来年1月16日(土)に「文化財をまもりー文化財のまもり手を育てるー」と題したシンポジウムの開催を予定しています。文化財の保護は未来永劫に続く活動であり、保存修復専門家の後継者育成は避けて通れないテーマと位置づけており、後継者育成に向けて若い世代に情報発信することが開催主旨に盛り込まれています。

文化財保護修復に限らず、いま、日本では技術継承法に悩む業界が多いと聞きます。とりわけ職人技術に依存する伝統工芸系の分野では、若い世代へのアピールもままならないまま、保護に奔走する行政の努力も空しく断絶する…というニュースも絶え間なく聞こえます。

しかし、若い世代も伝統や文化についてまったく興味がないわけではないはず。指摘される通り、その魅力や必要性・重要性の情報を届ける方策を考えることこそ、私たちの課題なのかも知れません。

今回取り上げた小松市立博物館の「インターネット公開」は、そんな意味からも示唆的です。単に情報を整理するだけでなく、自治体と複数の館が協力して「守り、伝えるための情報」をゴールに設定していることは、非常に有意義な試みであるように思えます。

<http://www.kubaco.jp/bunkazai-tohaku/index.html>

Clip & Think

アメリカ議会図書館が YouTubeなどに動画配信

今年3月、アメリカの国立図書館である「アメリカ議会図書館 (Library of Congress)」の興味深い発表が話題を集めました。世界最大規模の図書館である同館が保有する歴史的動画や音声データを、インターネットを通じて広く配信するとしたのです。

配信先は動画共有サービス「YouTube」や、Apple Computer社のデジタルコンテンツ配信システム「iTunes」など。配信内容は、トーマスエジソンスタジオが保有する100年以上前のフィルムやウエスタンハウスの産業映画、米国独立宣言草稿といった貴重な映像が目白押し。この計画は実行されたようで、現在、YouTubeに独自の「チャンネル」を開設しており、300本近い動画が視聴可能となっています。

もともと自館のWebサイト上でデジタルアーカイブの公開を積極的に行っている議会図書館。商用・非商用に関わらず時代の情報インフラに対応するその姿勢は、私たちも見習うべきものがあるのかもしれない。今後、インターネットが市民の情報発信・受信の主舞台となることが確実視されているだけに、(YouTubeはともかくとして) 文部科学省や文化庁も、歴史的・文化的資料のアーカイブや公開にもっと積極的になるべきではないでしょうか。もちろん、博物館も。

<http://www.youtube.com/user/LibraryOfCongress>

## ● 編集後記

今回の発行タイムラグは、比較的少なく済みました(汗)。第3号となった「MAPPS Press」をお届けいたします。当初は「4ページくらいなら何とかかなるだろう」と考えていましたが、実際に発行するとなると結構タイヘン。雑誌社などの苦勞も偲べれます。

今回は、小松市立博物館にご協力いただき、今後、大きな課題と目される「博物館の情報整理と発信」についてまとめてみました。取材当日は、とにかく皆様のポジティブな姿勢を眩しく感じました。この場を借りて、お礼を申し上げます。(担当:U/I)



## 緊急雇用対策費を上手に活用。 わずか1年で情報発信への準備まで実現。

1年前に訪ねた時には、資料の情報どころか所在の把握さえままならないほど多忙を極めた博物館。学芸員・職員は、誰もが情報整理の必要性を感じつつも、どうにもならない「マンパワー不足の壁」に悩まされてきました。少しずつ作業を進めるしかないという覚悟を固めて地道に取り組んだものの、博物館スタッフには異動が付き物。せっかく手分けして資料を整理し始めても、作業は自然と途切れ途切れに。

そんな状況に焦りばかりが募っていたところに、朗報が舞い込みます。それは、政府から市へと話が降りてきた「緊急雇用対策」のニュースでした。皆様よくご存知の通り、まとまった人数のアルバイトさん方を雇用するチャンス。そこで、思い切って手を挙げて、市に対して博物館資料の整備を「短期集中」で仕上げるといった提案を行うことになりました。単に館内の情報を整備するだけでなく、それを広く市民に、全国に発信する機会にまで発展させる計画まで織り込んで…。

今回は、博物館の悩みのタネ・情報整理について。プラス、インターネットを活用した情報公開への道筋づくりを考える上での好事例として、小松市立博物館様にお邪魔して詳しくお話を伺いました。

他の館では、どう対処しているのだろうか？  
博物館である以上、展示品・資料の整理・管理は必須業務。とはいえ、人員不足に喘ぐ昨今では、作品情報を把握し切れていないという館も多いのが実情です。今回お邪魔した館もそのひとつだったのですが、わずか1年ほどの間で資料整理に加えて情報公開まで道筋をつけることができたのか。いったい何があったのか？ というわけで、取材させていただきました。

# 博物館の資料整理

取材協力 小松市立博物館 様

〒923-0903 小松市丸の内公園町19番地  
電話：0761-22-0714  
Fax：0761-21-7683  
<http://www.tvk.ne.jp/~kcm>  
Email:kcm@tvk.ne.jp

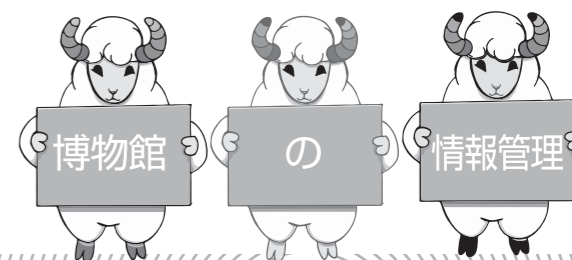
◎ 次ページ以降、劇的な進展の経緯とポイントをご紹介します！

# 理念と、機会と、モチベーション。 市関係者からも高い評価を得る 4館同時のデジタルアーカイブ推進事業。

まったく未整理の状態から、  
わずか8ヶ月で一部情報のネット公開を目指す！

緊急雇用対策費をうまく活用した

デジタルアーカイブ事業推進の好事例。



## 取材 レポート

# 小松市立博物館

### 1 この経緯と 事業実現へのポイント

市の緊急雇用対策費を利用して、館の情報整備事業を実施することになった小松市立博物館。提案の際、同意だけでなく高い評価まで受けることができたのは、事業内容に「地域全体の活性化」への視点が盛り込まれている点が大きかったようです。

市内4館の情報を統合する形で総合収蔵品データベースを作り上げ、小松市全体の「文化資産に関するデジタルアーカイブ」としてインターネット公開すること。自館の運営効率の話に留まらず、逆に市に対する貢献姿勢を強く打ち出し、評価を獲得したのです。

昨今の「インターネット社会」の進展は、目覚ましいものがあります。普通の市民が手足のようにネットを使う時代となった現在では、博物館としても「ホームページを持っていけばよい」というレベルでは済みません。公共の場と公共の資産を預かる公益目的の施設だからこそ、保有する情報をしっかり市民にフィードバックすることが大切。インターネットは、その格好のツールです。

うまく使えば、市民の地元への愛着や認知・意識の向上を促すきっかけにもなるはず。地域社会にとって非常に有意義な事業となり得るだけに、市職員も積極的に提案を受け容れてくれたそうです。

### 2 作業開始の前の 準備におけるポイント

実施に当たっては、管理システムの導入を軸に、登録するデータを整理するための臨時スタッフが採用されることになりました。データ入力のアルバイトとともにカメラマンも雇用して、テキストと画像データを同時に整備していきま。一方、管理システムでは、テキストなどのデータをシステム上一括登録できるように、Microsoft Excel 対応のフォーマットを作成。データ入力はExcel上で行うことになりました。

データ入力チームは、4人の女性スタッフで構成。2人ずつコンビを組み、分野ごとに作業を担当します。紙のカードからデジタルデータに移行するにあたっては、膨大な量のデータ登録が必要となります。女性たちは、最初にカードの束を渡された時は「気が遠く

なりそう」と思ったとか。しかし、実際に仕事を始めてみると「思ったより早いペースで進んでいる」とのこと。館にとっては頼もしい戦力になった様子。仕事場も活気に溢れていました。

### 3 実作業上の難所と 課題克服へのポイント

傍目には順調に見えるデジタルアーカイブ化事業。しかし、実際に作業を始めると、多くの課題が出てきます。

まず、データの入力作業。開始当初は、元となる従来のカード情報の不備、そして入力スタッフの知識不足もあり、進行は大変だったようです。用意されている管理項目に対し、紙のカードに書かれていない情報も少なくなく、学芸員や職員に聞いて回らなければなりません。加えて、頻出する専門用語も、入力スタッフたちを悩ませました。

一方、プロのカメラマンと3名の作業スタッフで構成した撮影チームも、いくつかの課題に直面しました。まず、1日に500回以上もシャッターを切るため、デジタルカメラのほう音が音をあけて

しまい、代替機の確保が必要に。また、撮った写真は将来にわたって印刷物などにも使用する予定なので、ある程度の品質が求められます。収蔵庫の空きスペースに機材を持ち込み、1点ずつ埃を払って撮影するのですが、空調などの設備もなく、見るからに重労働。動植物の化石から大型の民具まで資料もさまざまなので、ここでも取り扱いの知識が必要となります。こうした難題の数々は、すべて館長・学芸員・職員の皆さんとともに話し合い、一つひとつ善処していきました。とは言え、スタッフの頑張り頼らなければならぬ点も、当然残ります。

関わる人々の高いモチベーションと、惜しめない努力、献身的姿勢。デジタルアーカイブ事業は、何よりもチームワークが重要なのです。



今年7月に始まった事業は、来年3月に整備された情報の一部をインターネットで公開する予定。移行3年にわたって雇用を継続し、情報の充実にあたるそうです。チームは、現在も作業を継続中。ひとまずの成果がネット上で見られる日は、もつすべです。



モノによっては、撮影前に状態を整えることも必要。この日は、古い仏壇の修復作業にあたっておられました。自然に頭が下がります…。



紙のカードを見て調べながら撮影の段取りを。ただ撮れば良いというものではないだけに、作業は大変です。



女性2名×2チームの入力体制。黙々と作業に向かう彼女たちですが、和気あいあい職場は良い雰囲気です。

ただいま奮闘中！

デジタルアーカイブ事業  
推進メンバーの皆さん

あまりに膨大な資料の数々に、最初は戸惑ったスタッフの皆さん。現在では作業にも慣れて、館に助言できるほどのチカラで事業を強力に推進中です。

天晴